

ママたちの震災 ⑪

仮設回って よろず相談

仮設住宅を訪ねた助産師は、干している洗濯物に赤ちゃんの服がないか探した。泣き声を聞きつければそこに向かった。集会所のお年寄りに乳幼児がいる家庭を知らないか聞いた。

外出がままならず孤立している母子を支援しようと助産師の伊藤怜子さんは大船渡市、陸前高田市の仮設住宅を回った。だが、「個人情報保護」の壁に阻まれ、行政や仮設を管理する人から直接必要な情報を得られず自力で探した。

会えた母親からは子育てだけでなく、住宅での近所付き合いいな

どさまざまな相談が寄せられた。

「赤ちゃんが泣くのを迷惑と思う人に市役所へ通報された。市役所から赤ちゃんを泣かせないようにと電話が入った」「子どもが泣く時は窓を閉めて。うるさいから外で遊ばせるな」と近所から言われた」

子育てをしにくい住環境についての悩みが、赤ちゃんの健康や発育のことよりも多かった。

「お母さんたちは、自宅で話ができても気持ちもほぐれているから本音が出る。リラックスして助産師による相談をするんです」